

ぐびろが丘



編集長
山本 直毅 (医学部メディア部)

編集部
長崎大学医学部ぐびろが丘編集部
長崎医学同窓会
〒852-8523 長崎市坂本1丁目12番4号
☎095-848-5484
E-mail: ryojun-do@med.nagasaki-u.ac.jp

印刷
日本紙工印刷株式会社

海外リサーチ

ドイツ ビュルツブルグ大学 4年 横田 有美



初日に担当教官に会い、これからの研究予定を聞くと、「何を言っているの。あなたは臨床実習に来たのでしょ。この大学の人がそう思って準備している」と言われたのです。私は渡航前に、研究内容の希望についての詳細を書いたエッセイを送っており、登校初日からリサーチを始められると意気込んでいたために、とてもショックを受けました。しかし、ドイツでの2カ月半を充実したものにしたいと、頼ることができた人は誰もいなく、海外でも働いてみたいという想いがあり、海外リサーチセミナーは将来のための良い経験になると考え、思い切って応募しました。海外リサーチセミナー先としては、他にもいくつかの大学がありましたが、ビュルツブルグ大学は、これまで14人のノーベル賞受賞者を輩出しており、高いレベルの研究が多く行われていること、また、私の希望する内分泌分野の研究が活発に行われていることから、この大学を選びました。

私は、2012年12月から2013年2月中旬までの約2カ月半の間、ドイツのビュルツブルグ大学で基礎医学研究を行いました。将来は日本だけでなく、海外でも働いてみたいという想いがあり、海外リサーチセミナーは将来のための良い経験になると考え、思い切って応募しました。海外リサーチセミナー先としては、他にもいくつかの大学がありましたが、ビュルツブルグ大学は、これまで14人のノーベル賞受賞者を輩出しており、高いレベルの研究が多く行われていること、また、私の希望する内分泌分野の研究が活発に行われていることから、この大学を選びました。



研究室

また、私の希望する内分泌分野の研究が活発に行われていることから、この大学を選びました。ビュルツブルグ大学でのリサーチセミナーの制度が私の代から変わったことや、いくつかの連絡の行き違いにより、登校初日から多くのトラブルに見舞われました。登校

また、学内では学生と関わる機会がなかったのですが、学外では同年代の様々な国籍の学生と、英語で話したり、討論する機会が何度かありました。彼女たちは英語が母国語ではないにもかかわらず、自分の意見を堂々と述べて相手を納得させており、日常会話でやるとの私よりもっと英語の勉強をする必要があることを痛感させられました。2カ月半という短い期間でしたが、今回の滞在では本場に多くのことを

経験しました。このような素晴らしい機会を与えて下さった先生方、色々な手続きをしてくださった学務課の方々、遠い日本から応援し続けてくれた友人と家族に、心から感謝しています。この経験を生かして、将来立派な医師になれるように日々精進して参りたいと思います。

海外リサーチ

オランダ ライデン大学 4年 松本 愛世



ドイツの風景

私は今回、2012年12月2日より、オランダ・ライデン大学で10週間のインターンシップをさせていただきました。まず、ライデンは、首都のアムステルダムより車で30分ほどの距離に位置し、オランダ最古の大学である、ライデン大学が所在する、歴史ある学生都市です。大学の周りには、アパート、バー、クラブ、安いレストランなどが立ち並び、そしてそれらほとんどはライデン大学

生が利用しています。また、ライデン大学は日本・長崎とゆかりが深く、シーボルトは日本を去った後、ライデン大学で日本の文化について研究し、その影響により、日本語学の周辺では、シーボルトハウスや、日本独自の植物(さくらや梅など)を見つけることができました。私が、オランダに入国し、ライデンで過ごして一番驚いたことは、オランダ人がいかに語学力に長けているかです。私が出会ったオランダ人は、なんと全員英語が話せるのです。大学生だけでなく、中学生やお年寄り、マクドナルドの店員さんや刺青を入れたバーの店員さんも全員話せるのです!!私はホームステイをしていましたが、私のホストファミリーの一人だった、中学3年生の女の子でさえ、私よりも圧倒的に英語が上手でした。

ていた。と教えてくれました。テレビでは、イギリスやアメリカの番組も多く、子供が見るアニメや、映画も英語で放送され、オランダ語の字幕があるのみでした。社会全体で、人々の英語の語学力を上げようという取り組みが盛んで、国士も小さい日本も、学ぶべき点がたくさんあるように思われました。

さて、私は、ライデン大学の直接の付属施設ではありませんが、ライデン大学敷地内にある、CHDR (Centre Human Drug Research) という、Drug Developmentにおける、早期臨床試験(Phase 2)、「いわゆる「治験」を遂行する施設でリサーチをさせていただきました。早期臨床試験とは、創薬過程の動物実験が終わり、その後初めて健康な被験者を用いて行う試験で、薬の安全性や副作用の発現などを検証する場です。CHDRのクライアントには、アメリカのファイザー社、イギリスのアストラゼネカ社、日本ではアステラス製薬などが挙げられ、様々な国、製薬会社からの依頼を受けて、治験を遂行しています。また、CHDRでは、オランダ人だけでなく、オーストラリア人、メキシコ人、中国人など、様々な国籍の研究者がいらつしやう、基本的には英語でコミュニケーションをとっています。私が携わらせていただいたのは、様々な種類の疼痛を起こさせる機器のシステムの開発でした。

鎮痛薬の臨床試験を行うためには、まず、健康な被験者に疼痛を与えなければならず、その疼痛を与える機器の薬理的検証を行いました。私の指導員を始め、一

緒に勉強していたインターンシップ、他の研究者の方々は、本場にフレンドリーで、薬学の知識が少なかつた私を、いつも親切に手伝ってくれました。英語で上手に話せることができない私に、たくさんの時間を割いて聞いてくださり、専門英語の聞き取りができない私に、何度か話して下さりました。こんなにみんなを困らせてしまい、申し訳ないと感じることに言っていると、あなたはインターン生から、自分の学べる最大限のことを吸収して、勉強して、日本に帰りなさい。もっというんな人に助けを求めても良いんだよ。」とおっしゃって下さり、気持ちが救われたことをはつきりと覚えていきます。

そして、このインターンシップで驚いたことがあります。ほとんどの人が、16時半ごろから帰る支度をし、17時にはほぼ全員のスタッフが研究所から出ていきました。また、男女問わず、仕事中心で、寝ている人は一切おらず、いたるところでお互いに議論し、時に言い合いになる場面も見られ、驚いたこともありました。クリスマスパティーをしたり、誰かがプレゼンテーションを行った日には、みんなでレストランに行き慰労会開いたりもしています。さらに、毎週金曜日の夕方は、施設内のカフェテリアで飲み会が行われます。ビール、ワイン、オランダの伝統的なお酒のジュネーヴァなどが振る舞われ、仕事のことは忘れ、同僚と話をしながらひたすらお酒を飲んで帰ります。オン・オフの切り替えがはつきりしているな、という印象を受けました。

CHDRでは、研究者の他にも医師、看護師、薬剤師、統計学者などたくさんいるのですが、皆さんの職種があり、部門に分かれています。職種を超えて互いに信頼関係が築かれていて、CHDRのスタッフ全員がひとつのチームのように動いているようでした。

このように、私は日本でも見られないであろう、習慣を、身を持ってオランダで体験することができました。仕事は熱心にし、自分の意見ははっきり述べるが、一歩仕事の外に出ると、お互い友達のように接する。彼らの仕事への姿勢は、今後私が研究者あるいは、医師になるにあたっての目指すべきポイントであると実感しました。

最後になりましたが、このインターンシップ期間中に日本から支援して下さった、旧第三解剖教室の小路教授をはじめ、私と関わって下さったすべての人に感謝申し上げます。ありがとうございました。



海外リサーチ

ドイツ留学を通じて

4年 岡村 岳

ドイツに少し行ってきた。印象深い時間を過ごした。それなりに困難な時間でもあったが、要約すればたった一言である。自分の無力さを痛感した。それが最重要の収穫だったし、だからこそ人の優しさに感謝できた。当時の私にとっては、自分の研究活動内容よりも重要なことを多く学んだように思う。

例えるなら細いロープの上を綱渡りしているかのような日々だった。近くにいる誰かの、ちょっとした親切のかけらを少しずつ繋ぎ合わせてできた、細くて細くて華奢なものだった。

当然と言えば当然であるが母国語は英語ではないので、英語で十分なわけでもない。状況を判断するために参考にする人の振る舞い、表情、セリフ、人間関係。日本と違うのは当然だが、自分が赤子にでもなったかのようには自分ひとりでは何も分らない。自分で判断し自分の手で何か出来るようになるまでには時間が必要であった。

また、良い意味でも悪い意味でも整備されていないコースのようであったので、現地に行けば自分で道を切り拓いて行かなくては行かなかった。

そして拍車をかけたのは、「自分には何の価値もない」という、脅迫観念にも似た精神状態に陥ったことだ。面倒ながらも自分に協力してくれた人に対して、自分は何をしてあげられるだろうか？日本ならともかく、笑える話や楽しい話には文化の違いがあり言

語の壁があり、持っている知識も彼らを喜ばせるには不十分に思えた。ちよつとした芸にも限度がある。強いて言うならば、「私は留学生の世話をしてあげる程に国際的に開けているんだ」という満足感や精神的アクセサリー程度だろうか。「ありがとう」と言う他に何も出来ない自分が悔しくて歯痒かった。

「自分は何だかって出来るさ」とまで傲慢には思っていないが、自分が何か有益なものを誰かに渡せる「くらいには思っていたから、ショックだった。

だからこそ、無価値な自分に誰かが優しくしてくれることが心から嬉しかったし、自分のために何かをしてくれる人から感謝した。社会人として当然のことなのかもしれないが、親切心の本当の意義を感じたような気がする。

留学の序盤、私の所属先の呼吸器内科が担当官の都合により私を受け入れられなくなったというトラブルが起きた。調整中は様々な部署や病棟に配属され、早いところでは1日、長くとも3日という単位で移動していった。ただでさえ通常の病院業務に圧迫されそうなかで、母国語の通じない留学生が来た。面倒だ。周囲の目は冷たく、居場所を見つけてくれることは容易ではないことが多かった。そんな中、呼吸器検査室に所属したときに私の担当をしてくれた、マーガレットという方は私の留学のハイライトである。60才は優に超えており、

ここに居させて欲しいのだ、研究させて欲しいのだ、明日はどうしたらよいのかなんてことは、誰かが教えてくれるところではなかった。留学中はいつも自分で交渉したりしなければいけない気がした。相手は誰かに分けてあげた気がする。自分があんなに悪いとも思っていない。相手が「すみません」くらいは言おうと思っている。その際には、機会を与えてくれた方々や支えてくれた方々に心から感謝しているとも伝えたい。

多なる出資や援助を受けて、こんな小学生みたいなことを言っていたら、関係者は不愉快で憤ってしまうかもしれない。研究のために留学したのに、自分ではあんなに悪いとも思っていない。相手が「すみません」くらいは言おうと思っている。その際には、機会を与えてくれた方々や支えてくれた方々に心から感謝しているとも伝えたい。

多なる出資や援助を受けて、こんな小学生みたいなことを言っていたら、関係者は不愉快で憤ってしまうかもしれない。研究のために留学したのに、自分ではあんなに悪いとも思っていない。相手が「すみません」くらいは言おうと思っている。その際には、機会を与えてくれた方々や支えてくれた方々に心から感謝しているとも伝えたい。

新入生諸君、入学おめでとう！そして、長崎大学医学部へようこそ。大学生活という未知の体験を前にして、さまざまな期待と不安で胸をいっぱいにしていくことだろう。ぜひとも、在校生である先輩たちをお手本にして、輝かしい青春時代を過ごしてほしい。そして、言うまでもないことであるが、先輩たちのお手本にすべきでない点はない。3ヶ月もすれば、先輩たちの中にお手本にすべきものは何も無いという事に気づくであろう。

さて、今回、紹介するのは2008年に新しく設立された「園芸部ぐびろ」は文字通り草食系の非常にゆるい部活である。

ちなみに、筆者は飲み会しか出たことがなく、ひなげしを咲かせたこともなければ、土いじりをしたこともない。これを読んでみるみなさんは、なんで、てめえが部活紹介してるんだよ、と思ったであろう。実は、筆者もそう思う。何と云うか、まあ、いろんな縁があって書かせてもらっている。

私がグビロが丘に出会ったのは7月のある暑い日のことだった。ぶらぶらとポンベ会館の前を通ったら、その脇に小さな道があることに気づいた。そして、小さな看板に「グビロが丘」と書いてあったのである。筆者は小さな路地に弱い。路地を見るときは、覗き込みたくなる。その向こうに何かがあるのか、ついつい確かめたくなる。みなさんもそんな気持ちになることはないだろうか。そのときの筆者もまた、路地フェチを抑えきれず、ついつい小道に入り込んでしまったのである。

ポンベ会館の裏を通り、道は薄暗い丘に続いていった。うっそうと茂った木々が日をさえぎって、うねうねと丘を登る道はひんやりとすら感じられた。あたりには人の気配もなく、ただ、蟬の声だけが耳に痛いほど響いていた。

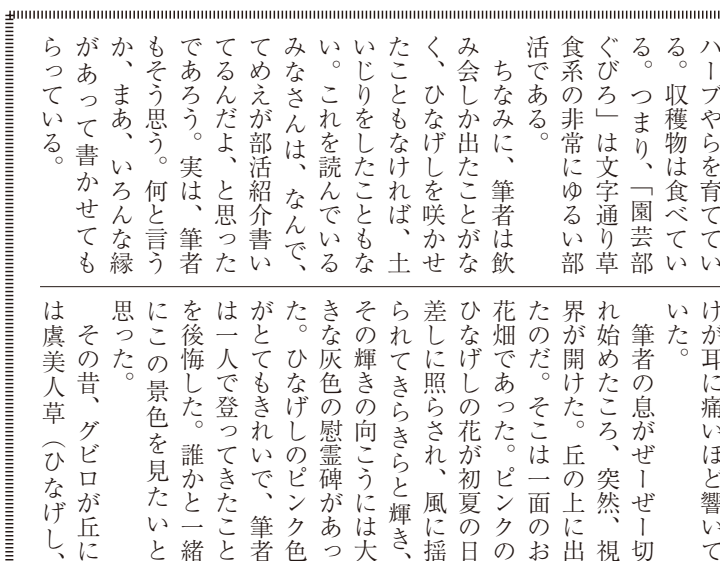
筆者の息がゼーゼー切れ始めたころ、突然、視界が開けた。丘の上に出たのだ。そこは一面の花畑であった。ピンクの花畑であった。ピンクの花畑であった。花畑の中は、ひなげしの花が初夏の日差しに照らされ、風に揺られてきらきらと輝き、その輝きの向こうには大きな灰色の慰霊碑があった。ひなげしのピンク色がとてもきれいで、筆者は一人で登ってきたことを後悔した。誰かと一緒にこの景色を見たいと思った。

その昔、グビロが丘には虞美人草（ひなげし、ポピー）が咲き誇り、精神科の当時の教授であった石田昇教授が、虞美人草が咲く路の丘グビロが丘と名づけたそうである。しかし、1945年8月9日に原子爆弾が投下され、グビロが丘はもろろんこと、長崎医科大学および付属病院は壊滅し、角尾学長をはじめ職員、学生あわせて890余名という多くの犠牲者を出した。グビロが丘にある慰霊碑は、生き残った方々が医学部敷地内で亡くなった方の遺骨を拾い集めて、この丘に埋葬したことから建てられたものである。

しかし、「園芸部ぐびろ」が創設されたころの丘は荒れ放題で、雑草だらけであつたらしく。それを「もう一度、虞美人草が咲き乱れる丘にしよ」との呼びかけにより、現在のよう立派な花畑ができたのである。

前述の通り、筆者は飲み会しか参加したことはないが、「園芸部ぐびろ」がたいへん平和な部活であり、ほかの部活との兼ねも十分に可能であることは間違いない。6年間という長い学生生活の間にはさまざまな出来事が起こり、それなりに傷ついたり、つらい思いをすることもあるだろう。そんなとき、「園芸部ぐびろ」を思い出してほしい。植物とふれあうことによって、傷ついた心も癒されること間違いなし、である。

そして、入部しなくてもいいけれど、機会があれば、グビロが丘には誰か大事な人と登ってほしい。それは恋人でもいいし、友達でもいい。グビロが丘はとても静かで穏やかな場所である。二人きりでひなげしの花を見ながら、普段できないような話をゆっくりするのでもいいと思う。ただし、人が来ないからといって、不適切な行為による交流は厳に慎んでいただきたい、ということも最後に言っておく。



↓グビロが丘 ぐびろ日記 <http://gubironikki.blog91.fc2.com/blog-category-1.html>

多なる出資や援助を受けて、こんな小学生みたいなことを言っていたら、関係者は不愉快で憤ってしまうかもしれない。研究のために留学したのに、自分ではあんなに悪いとも思っていない。相手が「すみません」くらいは言おうと思っている。その際には、機会を与えてくれた方々に心から感謝しているとも伝えたい。

園芸部ぐびろ

飲み会しか参加したことはないが、「園芸部ぐびろ」がたいへん平和な部活であり、ほかの部活との兼ねも十分に可能であることは間違いない。6年間という長い学生生活の間にはさまざまな出来事が起こり、それなりに傷ついたり、つらい思いをすることもあるだろう。そんなとき、「園芸部ぐびろ」を思い出してほしい。植物とふれあうことによって、傷ついた心も癒されること間違いなし、である。





私たちは室内合奏団は、始まった当初は経験者だけからなり、5人だったこの部活も、最近では初心者から楽器を始める人も多くになり、30人強の大きな部活になりました。

演奏に使っている楽器は主にヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、フルート、オーボエ、クラリネット、ピアノで、曲によってはサクソフォーンやギターも使います。ピアノ以外は各自自分で購入した楽器で練習しており、演奏する楽器に愛着を持って練習に励んでいます。時にはほかの人が使っている楽器を弾かせてもらったりもしているのですが、沢山の楽器に触れあうことができる部活です。

練習日は毎週月曜日の17時から19時です。週に一回の少ない練習のようにも見えますが、自主練習には記念講堂を自由に使用しており、定期練習の間にも集中して練習をするよう頑張っています。初心者からは始める人も増えたので、新しく楽器ごとの練習を加え、先輩から教えて頂きながら基礎を固めています。



演奏活動は主に病院ロビーでのコンサート、定期演奏会、依頼を受けての演奏会等です。今年新しく幼稚園の卒園式で演奏をさせていただきました。室内合奏団の演奏は主に少人数の編成で行っており、例えばヴァイオリン2本、ヴィオラ、チェロや、フルート2本、クラリネット、オーボエなどです。オーケストラの迫力には敵わないところもありますが、聞きに来てくださる方に少しでも満足していただけるように予定を合わせて自主練習をしています。ロビーコンサートや幼稚園では、多くの方が知っている愛のあいさつ、アヴェ・マリア、さらさら星などのクラシックから、ルパン三世、トトロ、ホールニューワールドなどのポピュラーソングまで幅広く演奏します。定期演奏会では、モーツァルトやハイドンのクラシックを演奏します。また、定期演奏会では全体合奏も行い、小さなオーケストラもできます。それぞれの演奏会を目標にして皆で頑張っています。ぜひ、演奏会を聴きにきてください。

サークル紹介

室内合奏団

サークル紹介

FLAN

こんにちは。私たちはFLANという救命救急サークルです。創部三年目で、まだできたばかりのサークルなので、これを機にみなさんに、FLANがどんなサークルで、どのようなことをしているのか、少しでも知っていただき、興味を持っていただけると幸いです。

創部のきっかけ
以前から、他大学のワークショップに参加していた先輩方が、長崎でもやりたい、と思いきかけです。現在、二十人以上のメンバーが集まり活動しています。

活動目的
主な活動目的は三つあります。まず一つは、BLSという一般の人にも簡単に習得できる一次救命処置を広めること。二つ目は自分たちの医療の知識を広げ、深めること。三つ目は、他大学との交流を通じて、同じ志をもった人と仲良くなり、意見を交換したり、さらなるモチベーションを高めることです。

活動内容
まずはなんといっても学生ワークショップです。大学内に限らず、他大学の人たちを集めて、学生みんなで救急について実践を交えながら学ぶワークショップです。このワークショップは、友達の輪を広げることもできるし、楽しみながら自分の医療に対するモチベーションを上げることもできる最高の活動です！部員でなくても参加することは可能なので、興味を持たれた方は是非一度参加してみてください。

次は、ER見学です。やはり、救急について勉強している以上、現場についても知っておくのが一番です。長崎大学の救命救急センターを見学させていただきます。さらに、地域教育もしています。これは、私たちがワークショップや勉強会で学んだことをもっと多くの人に伝えて、一人でも多くの命を救う手助けができれば、という思いで行っています。中学校などにもいき、講習会を行っています。

最後に忘れてはいけないのが月に一度程のペースで開かれる勉強会です。テーマを決めて先輩方に教わったり、議論を交わしたりして知識を広げ、理解を深める貴重な機会です。救急に限らず医療に関することを幅広く扱っていきたくと考えています。是非みなさんにも参加していただきたいです。

自分の参加できるときに、参加したいワークショップや勉強会に参加する、という気楽な感じで大丈夫です！今日紹介した中で、どれか一つでも興味を持っていただけたら気軽にHP: <http://flan-nagasaki.jindo.com> にアクセスしてみるか、近くの部員に声をかけてください！いつでも大歓迎です！

また、もっとFLANについて知りたい方も、HPにアクセスしてみてください。活動している写真なども載せています。これからFLANをよろしくお願います。



最後に
FLANはたくさんの方の活動をしています。部員全員がそのすべてに参加しているわけではなく、部員のほとんどが兼部をしています。

平成24年度（第24回）ポンペ賞受賞者

進級状況

成績優秀者（学業成績 上位3位）

体育系野外活動貢献者

1年生117名中99名、2年生133名中119名、3年生122名中113名、4年生102名中100名、5年生98名中97名が進級した。

今年度の留年者は44名、休学者は3名、退学者0名であった。



伊藤 裕也



古賀 勝治



富永伊知子



有田 美里



平成24年度 医学部卒業証書授与式



卒業式・謝恩会を終えて



謝恩会委員長
弓削 瞬介

去る3月25日、例年より一足早く満開となった桜の下で、私たち長崎大学医学部医学科第59期生は無事に卒業を迎えました。それぞれに思い出深い6年間を過ごした大学生活の終わりであり、また医師としての新たな日々が始まりともなるこの日をお世話になった先生方、温かく支えてくれた家族、そしてかけがえない沢山の仲間たちと祝い合えたことを大変嬉しく思います。

6年前の春、当時まだ改装前だった附属病院の講義室に初めて足を踏み入れたとき、これからこの地で医学を学ぶのだという高揚感と、目の前に広がる膨大な時間に対する僅かな不安を感じました。実際に学生生活が始まると、実習、レポート、試験に追われる多忙な日々が続いていました。たびたび苦しい局面にも見舞われましたが、ともに同じ境遇を過ごす仲間がいたから、挫けることなく高い目的意識を保って学習を継続できたと信じています。また、医学という難解で、曖昧で、しかし果てしなく奥の深い学問と対峙しているという充実感、決して嫌いなものではないと信じていました。



卒業式風景



謝恩会風景

ニケーションの方法論に触れることができませんでした。これらは理念だけの存在ではなく、実社会や医療においても応用可能なもので、勉強に追われるあまりに視野が狭くなるのがちな医学生としての生活の中で、科学ではなく文化の側面から事象をとらえることの面白さを知る貴重な経験となりました。

次に謝恩会委員の活動についてですが、私自身は4年次に先輩を通じて推挙されましたので、会長職を務めさせていただきました。他の3名は学年の有志でしたが、頼りがいのあるメンバーに恵まれたことは幸運でした。そして今年度の謝恩会も、私たちが委員の働きのみならず、学生および教職員の方々のご協力により円滑に運営することができた。

現実にはしばしば残酷であり、今後直面するであろう困難——すなわち努力によっても報われない結果に終わった時や、医師の職責の大きさを改めて認識せざるを得ない場面に遭遇した時、重圧に押しつぶされそうになることがあるでしょう。しかし、長崎の夜景を思い出して心を鎮めることが必要なのかもしれません。その上で、どれほど困難な道であろうと、私たちがやらねば誰がやるというのか、そしてこの道を選び取ったのは他でもない我々自身なのだ肝に銘じ、自己研鑽と謙虚さを忘れることのない医師を目指して参りたいと思います。

最後に参りましたが、指導医の先生方におかれましては、時に学生特有の無鉄砲な行動や言動で困らせてしまった未熟な私たちを、卒業まで辛抱強くご指導いただきましたことに感謝いたします。また、快適な大学生活をサポートして下さいました職員の方々、その他すべての医学部関係者の皆様、本当にありがとうございました。そのような方々に心よりの謝意を表して、この拙文の結びとさせていただきます。

《学生の声 in 目安箱》

@全学施設

K: 全学の施設が今はもうほぼ全部建て変わったらしいですよ。
Ho: そうなのか。こちらが知ってる教室はもうないのか。なんだか寂しい気もするな。
S: でかい教室の講義は「いろんな意味で」人気だから教室番号を見て選択科目を決めていたな(笑)
Y: 憲法とかね(笑)
K: 今思えばあの時期が一番大学生ぽかった気がしますね(笑)
E: 良い意味で雰囲気が違うね! 人も多く、明るい!
Hi: 懐かしの教養セミナーでは他学部と交流して新鮮で楽しかった! まあ、担当の先生にもよるみたいだけど(笑)
K: ここ2、3年は医学部の人たちだけでやってるらしいですよ。
S: それで教養なのか...
Ho: 医学部も改修工事が進めばいいのに。実験棟はいろいろ出来るみたいだけど。
Y: 生協は新装開店したね!
Hi: かつてアンケートとられたカフェテリアの件は何だったんだろう...

@進級

Ho: まず来年の一年生は教室に入り切るのだろうか。
Ni: 2講と4講にしか入りそうにない。
E: なぜあんなに落とすのか。
Hi: 落とすなら落とすでその後のサポートを機能させてほしい。
Y: ちゃんとそこが整っていないと他留の危険性が出てくるしね。
S: 医師不足を解消したいなら、入学者増やすよりストレートに卒業できる人を増やすべきだろう。
Hi: 今回の国試の結果を見てもその必要ありそうだよな。
Ni: 現二年生からカリキュラムが大きく変わっているから、先生方もその忙しさを考慮していただければ嬉しいんだけどね。
Y: 低学年で留年したらモチベーション下がるよね。

メディア部では様々な「学生の声」を募集中です。学生生活で日々思っていること、ぶちまけてみませんか? またインタビューや座談へ参加してみたいなどの要望も随時受け付けております! ぜひ医育支援センター前の目安箱に投函、もしくはryojun-do@med.nagasaki-u.ac.jpまでメールをお願いします! (文責: 山本)

第5回長崎大学ホームカミングデーを開催いたします。

日時: 平成25年11月23日(土) 場所: 長崎大学文教キャンパス内
詳細は分かり次第お知らせ致します。

メディア部 部員募集中!!

メディア部では、随時部員を募集しています! 目安箱の記事を見てもわかるように、学生による自由な記事が書けます! 兼部も勿論OKですので、興味が少しでもある方、文章を書くのが好きな方はどんどん連絡下さい!!

編集後記

お久しぶりです、まだ5月だというのに暑い日々が続いていますね、私は早くもクワラーを使っているにもかかわらずバテ気味ですが、皆さんはいかがですか? 今回は編集にはほぼ携われておりませんが、一応なんとか元気にやっております。
メディア部では、新しい方を常に募集しております。かなり自由に活動しておりますので、新しい紙面を作ってみたいという方、何かを企画してみたい方などがおられましたら、一声おかけください! また、ぐびろが丘を読んでいるだけの方々も、引き続きメディア部とぐびろが丘をよろしくお願いたします!
(山本直毅)

今号より本格的に編集に携わる事になりました、医学部4年の古賀と申します。よろしくお願いたします。本誌「ぐびろが丘」では、対談を大切にしているということで、学生生活を主題に、私たち学生自ら考え、互いの意見を交換できればと考えています。医育支援センター前に設置しております目安箱へのお便りも募集しております。前を通られる際は是非、ご覧ください。
(古賀 史)

本年度から、編集委員を引き継ぐことになりました、3年の松本です。もつと多くの医学部の学生に新聞を読んでもらえるよう頑張つてまいります。^^松本 学
はじめまして。今回より編集をお手伝いさせていただきます。今号は3年生の市川です。昨春秋に編入学し右も左も分からない状態ですが、このように大学に関わる活動に携わる機会をいただきありがとうございます。このお仕事が大学にいらつしやる様々な方々と関われる良ききっかけになればいいなと期待しています。
(市川宏美)

優秀な先輩が後を引き継いでくれ、今回はすっかり読者気分で見させていただきました。リサーチセミナーなどの記事を読むと、もう2年前の話かと懐かしい気分をさせてもらいました。気付けばもう最終学年、重い腰もやっとながら、そろそろ焦りが生まれてきたので、ぐびろが丘の記事や先輩達から元気をもらいつつなんとこの1年を乗り切ればなと思っております。今後も楽しい記事を書き続けたいです!
(川床健司)

最近新入生と絡む機会が多く、学生生活最後の1年である自分と、これから始まるの夢一杯な新入生を比べて、同じ学校なのに全く違う(年齢差のせいもあるかも)ことに不思議な気持ちです。
1年前のことさえ遙か昔に感じるほど、毎年たくさんの経験をしたと思います。後で振り返っても後悔しないよう、毎日思いきり楽しみたいです。
皆さんも学生生活、精一杯楽しんでください!
(小嶋翔子)